

## 田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）

——昭和四十年代（後期高齢期）のライフイベントと作品——

宮 川 充 司\*

田園俳人松本椿年（ちんねん）（本名松本傳次郎）は、明治二十年（一八八七）七月に静岡県駿東郡中嶋村（現在の静岡県駿東郡小山町中島）の旧家に生まれ、昭和六十一年（一九八六）二月に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳号と俳句の手ほどきを受け、その父親の没後から最晩年満九十八歳で生涯を閉じる臨終ぎりぎりの所まで、ほぼ一世紀に亘る日本社会の激動期を、農村の中で生活に密着した俳句とともに生きた俳人である。この俳人について、宮川（二〇一六）では、この俳人の年譜の試作版として、誕生から死に至るまでの個人史を判明している出来事から作成した。その手法として、単純に俳人としての年譜を作成するのではなく、それを構成するためにも、もっと大きな俳人の生涯という枠組で、俳人の個人史を作成し、その中から後に俳人としての年譜を作成できるような方向での資料収集とライフイベント（生涯の出来事）の分類整理をするという、基本的なアプローチを採った。この俳人の作風は、単なる想像や言葉遊びの手法で俳句を作るのではなく、農作業の傍ら体験する自然の観察や生活の中で起

こつていくさまざまな出来事を、そのまま作品とする生活俳句が本領であり、また「習作期」と「投句休止期」と名付けた時代を除き、月刊を基本とするいくつかの俳句誌にほぼ毎号のように投句を続けているので、俳句誌が現存しているものについては、作品の発表時期を特定することが可能である。また、その作品で表現されるライフイベントと、子孫から提供を受けた情報等付帯資料とを照合していくことで、作品から人生の中で起こった出来事を組み立て、年譜を構成していくことが可能と判断できた。

続いて宮川（二〇一七）では、この俳人の生涯を次の五つの次期に区分した。

- 一、誕生から俳句の習作期（明治二十年から大正末期頃）
- 二、俳人としての出発と戦前の俳句誌への第一次投句期（昭和初期から昭和十五年頃まで）
- 三、俳句誌への投句休止期（昭和十六年頃から昭和二十二年頃）
- 四、俳句誌への第二次投句期『大富士』『みづうみ』投句期（昭和二十三年頃から昭和五十八年頃）

五、最晩年終焉期（昭和五十九年頃から昭和六十一年二月）

また、明治大正期から戦後直後までの俳句作品と付帯資料、そこから抽出できる様々なライフイベントから、俳人の個人史を構成した。前稿（宮川、二〇一八）では、昭和初期から昭和三十年代までの俳句作品を分析し、それから推定したライフイベントから、その期間の個人史を作成した。昭和初期の俳句作品として、加納野梅が、主宰の俳誌『新草』の創刊号（昭和四年五月）から第四十号（昭和七年八月号）までの掲載句から選句編集し、昭和七年（一九三二）に刊行した『新草俳句集』（国立国会図書館デジタルコレクションとして公開）に収録されている松本椿年三十四句のうち、作句の背景が読み解けなかったいくつかの昭和初期作品の推定解説を行った。主宰の加納野梅は、大正リベラリズムの中で登場したジャーナリスト出身の俳人としても知られていたもので、他誌では扱われない句も投句されていたのではないだろうか。中には、大正十二年八月十八日に起こった富士紡績小山工場の労働争議（労働組合の結成騒動）の犠牲となり、工場を解雇、沼津刑務所で服役となった四人の労働者（岩田、一九九七）、椿年にとっては元工場の同僚に密かに同情を寄せた隠された意図の句が含まれていたのではないかという考察を行った。

元旦 元日の炊煙立つや刑務所 （『新草俳句集』一頁）

また、同じく、昭和四年四月に椿年の母校静岡岡県駿東郡小山町成美尋常高等小学校に、校長として、渡辺水巴主宰の俳誌『曲水』の選者でもあった古見豆人（本名古見一夫）が着任し、それを契機

に、『曲水』の同人となった。古見豆人を中心に、幼なじみで富士紡績小山工場に勤めていた早間冬青子や坂本緑村らと、社外の俳人湯山素鷗や湯山逸素らを加えて、「あゆみ句会」が起こされた。

この句会の俳誌『大富士』は、昭和六年（一九三一）一月号から刊行され、主宰古見豆人が逝去した昭和三十三年（一九五八）十一月号をもって廃刊となった。

この『大富士』への椿年の投句は、第二次世界大戦が始まり戦禍が拡大していく昭和十六年（一九四一）四月号を最後に中断され、昭和二十三年（一九四八）三月頃一時再投稿の痕跡が見られたが、再び復帰したのは昭和二十八年（一九五三）七月からであった。

しかし、この昭和初期から戦後に亘る椿年の投句活動の中心であった『大富士』も、昭和三十三年十一月二十二日、俳句の師でもあった主宰古見豆人が急逝した。その命日、十一月二十二日は花石路忌と呼ばれることになった。また、豆人が主宰していた『大富士』は主宰の急逝により、第二十八巻十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊となった。椿年が俳句誌の世界に復帰し、わずか五年の歳月が流れたところであった。この間の椿年周辺に起こった様々な出来事は、昭和三十年代を中心に、前稿（宮川、二〇一八）で詳述した。

その『大富士』の後継誌として、刊行されたのが小笠原龍人主宰の『塔』であった。椿年はその年の内に、同人参加したことは前稿で記載した通りである。

昭和三十一年（一九五六）三月に、『大富士』創刊時からの同人であった湯山逸素が、細道會を起こし、同人誌『細道』を創刊し、それに椿年も多く作品を投句したと考えられるが、この『細道』は主宰逸素が逝去した昭和五十七年（一九八二）九月の頃まで刊行さ

れていたということが推定できるが、残念なことにこの希少な俳誌を所蔵している図書館は所在していない。そのために、この俳誌や椿年の投句作品の実情は確認できない。

### 俳誌『塔』と『みづうみ』の作品

古見豆人が逝去した翌年一月、古見一夫（豆人）が静岡県鼎山町（現在の伊豆の国市）の菰山尋常高等小学校長をしていた時の教え子の一人で、門人であった小笠原龍人が、『大富士』の後継誌として、俳誌『塔』を創刊し、塔俳句会を起こす（小笠原、一九七四）。

俳誌『塔』は、椿年の遺品として松本家に残されている俳句誌に二号分が現存している。第十一巻第十一号（昭和四十四年十一月号）と第二十五巻第九号（昭和五十八年九月号）の二号であり、その俳誌への椿年の投句状況は判然としなかった。しかし、俳誌『塔』は、公益法人俳人協会が運営する俳句文学館に、初期の刊行巻号から、多くの巻号が収集所蔵されている。しかし、第一巻第十号（昭和三十四年十月号）の一号を除けば、比較的継続的に収集されているのは、第五巻第七号（昭和三十八年七月号）以降の巻号であり、しかもかなりの欠巻欠号がある。『塔』の所蔵館として、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室が、多くの巻号を所蔵しているが、第十巻第一号（昭和四十三年一月号）以降のものに限定され、しかも同様に、多くの欠号がある。この二館の所蔵する巻号から、椿年の掲載句の資料を作成した。投句状況を閲覧調査した。まず、俳句文学館所蔵の第一巻第十号を閲覧したところ、椿年の句は「水煙集 同人作品」に五句（二頁）、「塔俳句 小笠原龍人選」に四句（一三頁）掲載されていた。古本屋のネットワークから偶然『塔』の創刊号の

みを個人的に入手することができたが、小笠原龍人が余程急いで創刊したためか、ごく少数の大富士同人の参加のみで、椿年の句はなかった。第一巻第十号に九句椿年の掲載があるところから、第一巻の何号からかは確認できないが、少なくとも十号からはかなり継続的に投句されていたことが推定できた。また、塔俳句会に参加した大富士小山支部から同人となったのは同年齢の前田岳人と椿年のみであった。しかし、椿年の『塔』への投句は最晩年の昭和五十九年一月号第二十六巻第一号（通巻三〇〇号）まで続き、最も継続的な投句期間が長い俳誌であった。

なお、俳誌『塔』の欠号分を補完する刊行物として、塔俳句会の創刊十周年を記念した昭和四十三年（一九六八）に『塔創刊十周年記念合同句集 星苑』が出版されており、その一六八―一六九頁に、椿年の代表句が五十句掲載されているが、これらの句はいずれも昭和四十五年（一九七〇）に刊行した椿年の処女句集『句集 老稚』に採録されている。その句集の選句の大きな基盤になったものと考えられるが、半数の二十四句は過去の掲載誌への投句であることが特定できたが、残り半数は特定できないので、『塔』欠号分に掲載された句がこの刊行物のための新作句であるかの、いずれかであろう。

一方、原田濱人が主宰した『みづうみ』も多くの椿年の作品が掲載されている俳誌である。この俳誌ばかりは、昭和三十六年五月号（第二五六号）から昭和五十八年十一月号（第五二六号）までかなりの巻号が遺品として保存されている。ただし、この遺品も多くの欠号があり、それらの欠号補完分について俳句文学館所蔵の閲覧調査を行っているが、それらの欠号にも多くの椿年の掲載句がある。さて、その『みづうみ』についても、昭和五十八年十一月号までの

閲覧収集作業を行った。

俳誌『みづうみ』への同人参加は、原田濱人の門人でもあった湯山素鷗や湯山逸素らの奨めによるものと考えられるが、その同人参加の契機となった出来事として、昭和三十五年十月の静岡県小山町と山梨県境にある籠坂峠の原田濱人句碑の除幕式があったと考えられる。この句碑建立の委員長は湯山逸素であり、椿年もこの除幕式に参加していたと推定できる。『みづうみ』第三二三号掲載の椿年本人が書き残したエッセイ『私の雅号』（松本、一九六六）や、湯山逸素の句集『逸素句集』（湯山、一九六九）に掲載されている逸素年譜からの推定である。

椿年の『みづうみ』への投句は、第二五六号（昭和三十六年五月号）からであり、昭和三十六年一月からの同人参加であったと推定できる。また、『みづうみ』への投句は、昭和五十八年十一月の第二五六号（昭和五十八年十一月号）の竿頭欄四句（四頁）で終結している。『塔』と並び、最晩年までのかなり長い期間に亘って投句された俳誌であることがわかる。

これらの俳誌『塔』『みづうみ』二誌に投句された俳句作品から、前稿では、椿年の昭和三十年代のライフイベントを中心に、個人史を作成した。

昭和三十年代は、昭和三十年（一九五五）五月の妻すみとの死別から始まり、昭和三十九年（一九六四）一月孫娘京子の婚姻、三月の俳人湯山素鷗の死、七月の椿年の喜寿の祝と慶弔様々な出来事で終わっている。

昭和四十年代は、九月嗣子辰雄の病死という更に悲しい出来事で始まる。本稿は、そこから始まる四十年代の主なライフイベントを中心に、『塔』『みづうみ』の投句作品から、椿年の昭和四十年代

（七十六歳から八十七歳まで）の作品とライフイベントを考察する。

#### 昭和四十年代の椿年作品とライフイベント

昭和四十年（一九六五）は、前年三月に逝去した湯山素鷗の一周忌追善句会から始まる。湯山素鷗は、昭和初期からの俳句仲間であった。古見豆人が小山町に居住していた昭和四年（一九二九）から昭和十三年（一九三八）四月まで、毎月古見豆人主宰のあゆみ句会あるいは本社句会が開かれていたのは、湯山素鷗居樓上（通称あめ屋の二階）がその主な会場であった。その素鷗一周忌追善句会の椿年の句である。この俳句仲間の慣習として、仲間の誰かが亡くなると葬儀の日、あるいは後に追悼句会ないし追善句会が行われており、椿年の作品にもそうした折の句と推定できる作品も少なくない。

素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影  
花冷や句碑にたつぷり手向け酒

（『句集 老稚』三一頁）

（『みづうみ』第三一〇号 昭和四十年十一月号 八頁）

この年四月には内孫奈美江が婚姻を結ぶ。その祝句と推定できる句が残っている。

光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る

（『句集 老稚』五八頁）

（『みづうみ』第三一〇号 昭和四十年十一月号 八頁）

しかし、この年の九月には松本家に大きな不幸が襲った。嗣子の辰雄がリンパ腺悪性腫瘍で逝去する。この不幸な出来事の前後の出

来事やその心境を、椿年は淡々と俳句作品として綴っている。これらの作品は前稿（宮川、二〇一八）で詳しく記載したので、ここではその主な句のみを再引用する。

子は遠く虚空に秋の日は沈む （『句集 老稚』二一六頁）

（『塔』第七卷十二号 昭和四十年十二月号 六頁）

『句集 老稚』秋の部の最期は、「嗣子国立千葉病院に逝く 十五句」という前書きのある句で結ばれるが（同句集二一一―二一六頁）、右の句はその結びの句として置かれている。

嗣子辰雄を失った後の椿年の深い悲しみと落胆を淡々と語る句と考えられる作品がある。この句は『みづうみ』昭和四十五年五月号の湯城選「課題句 余寒」に投句したものである。昭和四十五年二月頃の句というよりそれより前の年にしたためて置いたものを投句したと考える方が自然かもしれない。

失意の目伏せて余寒の火をほじる

（『第二句集 限界』一三三頁）

（『みづうみ』第三六四号 昭和四十五年五月号 三二頁）

嗣子を失った椿年の深い落胆と悲しみが伝わってくる句である。

次の句は、前年昭和四十四年（一九六九）七月頃の作と考えられるが、情景は辰雄が亡くなる直前、昭和四十年七月―八月の作と考えることが自然であろう。その場合、千葉の国立病院で看病に出かけた娘イマの帰りが遅いので、心配して外で帰りを待っている父親としての椿年の姿を捉えている句となる。

帰り遅き娘に立つ露路や天の川 （『句集 老稚』一六一頁）

（『塔』第一二巻第四号 昭和四十五年四月号 二〇頁）

嗣子辰雄を失った後、孫達に囲まれた新しい家族関係の再構築を図りながら、椿年は少しずつ元気を回復していく。そんな椿年の心境を語る句が残されている。

迎火を子等に焚かせて見守れる （『句集 老稚』一七八頁）

（『みづうみ』第三三五号 昭和四十二年十二月号 八頁）

窓際に孫と良夜の膳を待つ （『句集 老稚』一六五頁）

（『みづうみ』第三三七号 昭和四十三年二月号 一〇頁）

昭和四十一年（一九六六）一月には、菩提寺勝福寺の住職が突然示寂するという出来事が起こった。椿年にとっては、心の師であり、禅の師でもあった老住職との突然の死別であった。

臨済宗勝福寺住職突如入寂

凍て戸叩く音に覚むれば訃報来る

明けきらぬ山門凍ての固き踏む （『句集 老稚』二二二頁）

冬雲をついて法衆鳴りいづる （『句集 老稚』二四頁）

喪主稚く焼香満座冴えわたり （『句集 老稚』二三頁）

一喝の冴えて歩燈蠟涙す （『句集 老稚』二三頁）

（『塔』第八巻第五号 昭和四十一年五月号 塔俳句 小笠原龍人選 五頁）

この年の五月には、住居近くの金時神社に、大富士句碑を建碑す



る除幕式があつた。この神社の社殿造営には、亡き俳句の師古見豆人の大きな貢献があつた。それを顕彰する意味で、大富士同人だつた七人の句を寄せた句碑であつた。筆頭は椿年であつた。

豆人先生句碑の除幕 五月八日ゆかり深き金時神社にて

献詠句 (大富士句碑)

秋晴や水に影もゆ社の朱

『塔』第八卷第七号 昭和四十一年七月号 燕信雁報 小

見山霞女 一四頁)

この句は、前年昭和四十年の九月頃、住居近くの金時神社で作句した句と推定できる。

金時神社

笹鳴や魚筒供げし大六天

秋晴や水に影もゆ社の朱

『塔』第八卷第二号 昭和四十一年二月号 水煙集 同人作品 七頁)

また、翌六月あるいは七月俳句仲間と大島旅行を行う。大富士句碑の建碑と同じく、失意の椿年を慰めるための俳句仲間の企てであつたかもしれない。

大島 『句集 老稚』一五〇―一五一頁 大島旅行五句)

船酔いもなく踏む土や風薫る

時鳥熔岩に声落し飛ぶ

『句集 老稚』一五〇頁) (『句集 老稚』一五〇頁)

爆発音背に夏寒く山下る (『句集 老稚』一五一頁)

梅雨日眩しあんこと並び撮られ居て (『句集 老稚』一五一頁)

梅雨寒や熔岩の吾が影でこぼこに (『句集 老稚』一五一頁)

『みづうみ』第三二二号 昭和四十一年十一月号 みづうみ俳句 瀧人選 五頁)

少し元氣を取り戻したこの頃の椿年の姿を髣髴とさせる句が残っている。いかにも椿年らしい農村に働く俳人の句である。

働くが却つて涼し野良へ出る

(類似句『句集 老稚』九〇頁 家よりも山が涼しと草刈りに)

『みづうみ』第三三五号 昭和四十二年十二月号 みづうみ俳句 瀧人選 八頁)

時と共に、嗣子を失つた椿年が少しずつ立ち直っていく様子が窺われる句であろう。

しかし、翌年の十二月末再び不幸な出来事が起こつた。姪で義理の妹でもあつた飯田のぶの長女の夫が、忘年会の帰りにトラックにはねられて死亡するというショッキングな事故が起こつた。

元日や床に据えたるお骨壺 (『句集 老稚』二〇頁)

『塔』第十卷第六号 昭和四十三年六月号 小笠原龍人選 二二頁)

会葬者揃う間庫裡のストーブへ

葬り来て浄めの手塩肝に入む

『句集 老稚』二二頁) (『句集 老稚』二二頁)

『みづうみ』第三四二号 昭和四十三年七月号 みづうみ  
俳句 瀧人選 九頁）

昭和四十五年（一九七〇）年四月、初句集である『句集 老稚』  
を出版する。椿年満八十二歳となっていた。

昭和四十五年十一月、老衰で病床の原田濱人を門弟と見舞った時  
の句と推定できる。原田濱人は、古見豆人の亡き後、俳句の師と仰  
いだ浜松出身の俳人であった。

師をかこみ小春の障子開けて撮る  
手に残る師の握力や小春風

『みづうみ』第三七五号 昭和四十六年四月号 みづうみ  
俳句 大橋葉蘭選 一三頁）

また、この頃、原田濱人との出会いとなった竈坂峠（静岡県山の  
梨県境に近い峠）にある原田濱人の句碑を訪ねたものと推定される。

濱人先生竈坂句碑

秋風に車かたよせ句碑に歩す

『みづうみ』第三七六号 昭和四十六年五月号 みづうみ  
俳句 大橋葉蘭選 一九頁）

その原田濱人は、翌々年昭和四十七年（一九七二）八月八十八歳  
で他界している（藤田、一九七〇）。

昭和四十六年（一九七二）四月は、実父松本勘太郎俳号吉野庵禾

裕の初日の出の句碑を本家の庭に、椿年自身の冬晴れの句碑を自宅  
前庭に建立した。その椿年の句碑は、次の句である。

冬晴れの底藻さやかに動き居り

『みづうみ』第三六五号 昭和四十五年六月号 竿頭欄  
二八頁）

同じ年の五月、菩提寺勝福寺では新住職を迎える晋山式が行われ  
た。

菩提寺勝福寺晋山式

晋山の経に天風来て薫る

『第二句集 限界』九〇頁）  
『みづうみ』第三八〇号 昭和四十六年九月号 みづうみ  
俳句 大橋葉蘭選 一五頁）

晋山式

燕や山門蒼き空ささえ

万緑を映し僧形美しく

管長着座薫風ひろがれる

お稚児衆薄暑の疲れ見えて来し

御仏の貌に届きて新樹光

『塔』第十三卷第十二号 昭和四十六年十二月号 水煙集  
三四頁）

また、この年の九月勝福寺の本山である鎌倉円覚寺の舍利法式に  
檀徒で参加する。俳句仲間の前田岳人も一緒に参加であったと考え

られる。

円覚寺舍利法式団参

手送りに投げて布団を運び込む

〔第二句集 限界〕七頁

布団敷く間廊下の冷えに立つ

〔第二句集 限界〕八頁

明け切らぬ霧雨の舍利堂へ

〔第二句集 限界〕八頁

管長の一喝凜と冴え渡る

〔第二句集 限界〕八頁

法悦や鎌倉山の月まろく

〔第二句集 限界〕七九頁

〔みづうみ〕第三八六号

昭和四十七年三月号 みづうみ

俳句 大橋葉蘭選 七頁

昭和四十七年七月十二日小山町大水害で、松本家も田畑に大きな

被害を被る。農作物の被害で、途方に暮れるところを、淡々と句に

詠み込んでいる。

水見舞鼻つまらせて語られし

〔塔〕第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 塔俳句 小

笠原龍人選 八頁

尽の虫

曲りよき瓜を選みて馬とせし

(すだく 群れる)

田も畑も川原となりて虫すだく

白萩のさやかにゆれて花こぼす

決潰のダム底幽し尽の虫

〔塔〕第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 水煙集 同人作品 三四頁

昭和四十七年十月、伊勢に団体バス旅行。気のあつた俳句仲間の石田仏子も同行している旅であつた。十三夜のその夜は雨天で月は見えなかつたようだ。

窓越し白波見ゆる十三夜

〔第二句集 限界〕一四七頁

〔団体バス一泊旅行〕

波荒るる雨の二見の十三夜

〔第二句集 限界〕一四六頁

〔塔〕第十五卷第七号

昭和四十八年七月号 塔俳句 小

笠原龍人選 七頁

昭和四十八年（一九七三）三月、同年同郷の俳人前田岳人逝去。

岳人逝く〔第二句集 限界〕岳人逝く五句 七九―八〇頁

道穴の囲い臈に通夜婦

〔第二句集 限界〕七九頁

吾にもの言ひたげ遺影冴返り

〔第二句集 限界〕七九頁

次に逝くは吾かや春の雲仰ぐ

〔第二句集 限界〕八〇頁

春時雨来そうな風や花輪ゆる

〔第二句集 限界〕七九頁

花冷の土かけ永遠の別れかな

〔第二句集 限界〕七九頁

〔みづうみ〕第四〇二号

昭和四十八年七月号 竿頭欄

(一) 二六―二七頁

昭和四十九年（一九七四）三月、孫や曾孫に囲まれて、平穩な米寿の祝いを行う。

米寿（二句）



片言の曾孫<sup>ひこ</sup>の祝ぎ言のどけしや

あやかれと酒注ぎ廻るうららかに『第二句集 限界』五〇頁

『みづうみ』第四一五号 昭和四十九年八月号 竿頭欄  
(二) 一八頁

ささやかな米寿を祝はる (三句)

あやかれとのどかに酒を注ぎ廻る『第二句集 限界』五〇頁

子孫曾孫うららかに顔を揃えけり

春光や膳のくさぐさ吾の自作 『第二句集 限界』三一頁

『塔』第十六卷第八号 昭和四十九年八月号 塔俳句 小笠原龍人選 八頁

この年の五月、石田仏子和光市に転居。五月送別句会。

九月家督を嫡孫典彦に譲る。

孫にゆずる登記すまし月涼し

『塔』第十六卷第十一号 昭和四十九年十一月号 水煙集  
同人作品 三〇頁

### 昭和三十年代終わりから四十年代初めの孫たちを吟じた句

椿年が戦前孫を詠んだ句は、『大富士』第九卷第十一号に孫のこ  
とを吟じた二句があつた(宮川、二〇一七)。その年の一月に生ま  
れた初孫の光弘を吟じたと推定される二句である。この初孫は昭和  
十九年二月満五歳(数年六歳)で早世している。

孫の尿膝にぬくとし今朝の秋

秋の灯や己がおならに怖ゆる兒

『大富士』第九卷第十一号 昭和十四年十一月号 五頁

それ以降、椿年の俳句作品で孫を吟じた作品が登場するのは、現  
存している俳誌では、『大富士』第十九卷第六号 昭和二十四年六  
月号からである。

霜やけの手と手めんこをぶつけ合ふ

山茶花やままごとの一人すねてゐて

『大富士』第十九卷第六号 昭和二十四年六月号 大富士  
句帖 古見豆人選 九頁

子どもの遊ぶ姿を吟じた句であるが、第二句はおそらく、内孫の  
京子と奈美江の幼い頃のままごと遊びの一風景ではないかと推定で  
きる。

子等は子等小使いほしさ路をぬく

『塔』第五卷第八号 昭和三十八年八月号 水煙集 二頁

臨海校どれも日焼けして帰る

『塔』第六卷第十号 昭和三十九年十月号 塔俳句 小笠  
原龍人選 二三頁

腕折りし子のうす笑い秋の風  
生傷のたえぬ子秋の風に笑む

『塔』第五卷第十二号 昭和三十八年十二月号 水煙集

同人作品 四頁)

この二句は、嫡孫の一人に、高校時代柔道部に入るなど、活発であるが故に怪我の絶えなかつた孫がいる。一面たくましいともいえるその頃の孫の様子を、半ば心配しながら吟じた句であろう。

前稿(宮川、二〇一八)でも触れた、昭和三十九年一月に嫁いだ内孫の京子の祝婚の句がある。

とつぐ娘の門出初東風めぐる石

『塔』第六卷第三号 昭和三十九年三月号 塔俳句 小笠原龍人選 二五頁)

ただし、この句の末尾は椿年の作風からは、次のような句の誤植の可能性もあるかもしれない。

とつぐ娘の門出初東風めぐりいし

昼東風

仏だんの春灯に震え角かくし

春寒や嫁ぎゆく娘の別れ言

昼東風や打掛け裾重くとする

椿つなぐ子に風軽く寺の庭

『塔』第六卷第六号 昭和三十九年六月号 水煙集 同人作品 五頁)

右の第四句は、京子の子ども時代の光景を吟じた句を、一連の作

品とセットにして投句したものと考えられる思出の句であろう。次の句も、同じ時の句または同じ趣の句であろう。

椿つなぐ子に御回向の鐘が鳴る

『みづうみ』第三六八号 昭和四十五年九月号 みづうみ俳句 大橋葉蘭選 一〇頁)

菜種梅雨種痘がつきてむづかる児 (『句集 老稚』四四頁)

『みづうみ』第二九四号 昭和三十九年七月号 みづうみ俳句 瀧人選 六頁)

冬休門田は子等の野球場

冬休残りの少々蜜柑撈ぐ

冬休スキー具ほしさアルバイト

御用聞は吾子と同級冬休

『塔』第七卷第二号 昭和四十年二月号 水煙集 同人作品 五頁)

子の机木の実大切そうに秘め

『塔』第七卷第二号 昭和四十年二月号 塔俳句 小笠原龍人選 二四頁)

雛の間に子は宿題の机おく

『塔』第七卷五号 昭和四十年五月号 小笠原龍人選 一九頁)

右の二句は、前年一月他家に嫁いだ孫娘の京子、あるいはこの年の四月に嫁いだ孫娘奈美江たちの子どもの頃に、作句したものを出して、投句したか、少女時代の光景を思い出して新たな句として作句した可能性もあるかもしれない。

次の句は、生傷の絶えない子として吟じた嫡孫を吟じた句と考えられる。

セルを着し孫の背丈に圧されけり

『みづうみ』第三〇七号 昭和四十年八月号 課題句 セル 今村一夜選 一四頁

子は友と同じ夏帽買うて来し

『みづうみ』第三二二号 昭和四十一年十一月号 課題句 夏帽 蓉影選 一四頁

窓際に孫と良夜の膳を待つ

『句集 老稚』一六五頁  
『みづうみ』第三三七号 昭和四十三年二月号 みづうみ 俳句 瀧人選 一〇頁

掘し子を探しあぐねて冬の月

『みづうみ』第三三九号 昭和四十三年四月号 誌上句会 冬の月 一七頁

右の句は、孫の誰かの子どもの時代の出来事を吟じた思出の句ではないかと考えられる。

幼い子どもがすねていなくなってしまった。さて、何処に隠れて

いたのだろうか。

冬の雲友の輪一人外れいる子 『句集 老稚』二二八頁

『みづうみ』第三四九号 昭和四十四年二月号 課題句 冬雲 蓉影選 一七頁

風邪の子の戸細に友の遊び見る

『みづうみ』第三五一号 昭和四十四年四月号 誌上句会 風邪 二〇頁

小学生くらいの童を吟じたこれら二句も、俳誌の課題に合わせ、過去に書きためた内孫の風景を吟じた作品で、発表した可能性が高い。この発表年代（作句を最短で昭和三十三年十二月頃とする）、初曾孫はまだ四歳くらいで二つの句の子どもとしては年齢が合わない。内孫の子どもの頃の光景を吟じた句ではないかと推定している。

### 昭和四十年代の曾孫を吟じた句

昭和三十年代の終わり、孫達の様子を吟じた句が俳誌『塔』あるいは『みづうみ』に相次いで、投句されていた。昭和四十年代に入ると、曾孫の句が作句されていく。

次の句は、前年の昭和三十九年（一九六四）一月に他家に嫁した孫娘京子に生まれた長男の生後五、六か月頃の社会的微笑が目立ってきた後の初曾孫を吟じた句と推定される。

庭若葉笑いおほへし児を腕 (腕<sup>かいな</sup>)

『塔』第七卷八号 昭和四十年八月号 塔俳句 小笠原龍人選 二七頁

尾を富士へ箱根へ振りて鯉幟 (『句集 老稚』一〇六頁)

『塔』第七卷九号 昭和四十年九月号 塔俳句 小笠原龍人選 二四頁

これは、時期的に孫娘京子の長男の初節句の頃に吟じた句と推定される。

頬に涙残し幟に児の瞳澄む (類似句『句集 老稚』一〇六頁)

富士明けし光りに立てし鯉幟 (『句集 老稚』一〇五頁)

『塔』第八卷第九号 昭和四十一年九月号 水煙集 同人諸家 四頁

この二句も同様であるが、初曾孫の初節句の頃の句であるか、翌年の端午節の頃に吟じた句であるかは明確ではないが、第一句は初曾孫の様子を吟じた句であろう。

ほろ蚊帳にひとり目覚めて笑まい居り

(『句集 老稚』一六頁)

『みづうみ』第三三一号 昭和四十二年八月号 課題句 蚊帳 新井素履選 一四頁

母衣蚊帳の中でお昼寝から覚めた初曾孫の赤児を吟じた句と考え

られるが、前年の昭和四十一年十月に生まれた二人目の曾孫(内孫京子の長生)を吟じた句ではないかと考えられる。

薄暑

種痘の児抱いて薄暑の医院出る

『塔』第十卷第十号 昭和四十三年十月号 水煙集 同人諸家 五頁

秋灯や母恋ふ翳もなき寝顔 (翳<sup>かげ</sup>)

『句集 老稚』一七三頁 一ヶ月余三才の曾孫を預る 秋

灯や母戀ふ翳もなき寝顔

『みづうみ』第三五九号 昭和四十四年十二月号 課題句

秋灯 蓉影選 二六頁

次は、初曾孫の袴着、数え年五歳の祝いの五句である。

袴着

袴着の拍手小さく響きけり

袴着に木の葉散りつぐ神の庭

袴着の歩音凜々しく石段を

袴着や親をうしろに闊歩して

神妙にぬかづくもあり袴着子

『塔』第十一卷第二号 昭和四十四年二月号 水煙集 同人作品 七頁

拍手に子は子の響き初日の出

(『句集 老稚』七頁)

初詣悴む子の手合わせやる  
（<sup>かじか</sup>悴む）

『塔』第十一巻第四号 昭和四十四年四月号 塔俳句 小  
笠原龍人選 七頁）

次の句あたりからは、二人目あるいは三人目の曾孫の様子を吟じた句とも考えられる。

這ひよる子抱き上げ外らす扇風機

『みづうみ』第三六一号 昭和四十五年二月号 みづうみ  
俳句 大橋葉蘭選 一〇頁）

この句の作句は最短で前年の昭和四十四年六月～八月頃となるが、その年の八月と九月に三人目と四人目の曾孫が誕生しているが、まだ這いよる子とはなり得ない。昭和四十一年十月に生まれた二人目の曾孫が一歳になる前昭和四十二年の夏に作句したものを、二年後の昭和四十四年十一月頃『みづうみ』に投句したと考えるのが自然であろうか。

次の句も、寒行（宗派により、托鉢・念仏・水垢離と多様）におびえた曾孫を吟じた句であろう。

おびえ見る児に寒行の声高く

『みづうみ』第三六四号 昭和四十五年五月号 みづうみ  
俳句 大橋葉蘭選 一二頁）

ねんねこの中に春浅き目が笑ふ

『みづうみ』第三六七号 昭和四十五年八月号 みづうみ

俳句 大橋葉蘭選 二〇頁）

前年に生まれた生後七～八か月の三番目か四番目の曾孫の姿を吟じたいかにも椿年らしい眼差の句であろう。

春宵

春宵や受話器に遠き曾孫の声

『塔』第十二巻第十号 昭和四十五年十月号 水煙集 同人作品 三二頁）

春風を蹴りけるおむつ替えてゐる（『第二句集 限界』三〇頁）

『みづうみ』第三七六号 昭和四十六年五月号 課題句

春風 酒井金風選 三五頁）

膝の児に春眠の額当てて覚む

『塔』第十三巻第八号 昭和四十六年八月号 塔俳句 小笠原龍人選 六頁）

春宵の子が居眠りて箸落す（『第二句集 限界』四九頁）

『みづうみ』第三七七号 昭和四十六年六月号 課題句

春夜春宵 梶本秋桑選 三一頁）

春眠の児をおずおずと抱き替える（『第二句集 限界』七〇頁）

『塔』第十三巻第九号 昭和四十六年九月号 塔俳句 小笠原龍人選 七頁）

膝の児に春眠の頭を当て覚む

『塔』第十三巻第九号 昭和四十六年九月号 水煙集 三五頁

姉となりて父と寝る子や螢籠

『みづうみ』第三八二号 昭和四十六年十一月号 竿頭欄 五頁

この姉と父は誰だろう。この時期の子どもの光景を吟じた作品は、曾孫を読んだ句が多数を占めるので、曾孫の女の子と解釈するのが自然である。昭和四十六年七月頃の作品と考え、その頃までに四人の曾孫に恵まれているが、女の子は二人目の曾孫一人である。おそらく孫の一家が里帰りしてきたのであろう。

赤児見に草餅搗いてそばもつて

『みづうみ』第四一二号 昭和四十九年五月号 蛍雪欄 (五月号) 二九頁

この昭和四十九年一月にはまた一人、六人目の曾孫(女兒)が生まれている。この年の三月初め頃その曾孫を見にまだ出始めたばかりの蓬を摘んで餅をつき蕎麦を打って、誰かが出かけたのだろうか。

次は、松本家の秋祭りの光景である。孫や曾孫達も集まった賑やかな松本家の風景が戻つてゐるのではないだろうか。

嫁ぎし娘等集まりて更かすや秋祭

『みづうみ』第三八三号 昭和四十六年十二月号 課題句 秋祭 梶本秋桑選 三二頁

#### 謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である松本喜美子・山崎京子・井上奈美江・松本典彦・松本時男の各氏による貴重な資料の閲覧許可と証言が研究の基盤データとなっている。同じく、国立国会図書館・日本近代文学館・静岡県立中央図書館・俳句文学館・埼玉県立熊谷図書館・御殿場市立図書館の貴重な蔵書を利用していただいた。また、実兄宮川光司・早苗夫妻には資料の収集にご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

#### 注

(一) 静岡県駿東郡小山町のおやま一〇〇年のサイトによる。http://www.fuji-oyama.jp/oyama100/100nenpyou.html

#### 引用文献

石田仏子(一九八二)『仏子句集 花筏』私家版  
藤田黄雲(一九七〇)『原田濱人―俳句とその生涯―』私家版  
古見豆人選 佐野閑江編(一九三四)『大富士句帖』第一輯 啓仁館  
(昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一号〜第三巻第十二号 昭和六年一月〜昭和八年十二月の掲載句から選句掲載)  
古見豆人選 佐野閑江編(一九三七)『大富士句帖』第二輯 大富士吟社(昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一号〜第六巻第十二号 昭和九年一月〜昭和十一年十二月の掲載句から選句掲載)  
古見豆人(一九三九)『富士に憑かれて』『大富士』第九巻第七号、四四



一四五頁

古見豆人選輯（一九四〇）『大富士句帖』第三輯、大富士吟社（昭和十五年八月発行）『大富士』第七卷第一号、第九卷第十二号 昭和十二年一月、昭和十四年十二月の掲載句から選句掲載）  
古見豆人（一九四二）『大富士風土記（續） 駿河小山支部』『大富士』第十二卷第二号（昭和十七年二月号）、四四―四五頁  
古見豆人選輯（一九四四）『大富士句帖』第四輯、大富士吟社（昭和十九年十二月発行）『大富士』第十卷第一号、第十二卷第十二号 昭和十五年一月、昭和十七年十二月の掲載句から選句掲載）  
古見豆人（一九五三）『足柄峠』『大富士』第二十三卷第十二号（昭和十八年十二月号）、二四―二五頁  
岩田昌（一九九七）『富士紡労働者・矢後利一の生涯』『静岡県近代史研究』第二三三号、三二―三五頁  
加納野梅編（一九三二）『新草俳句集』野梅吟社（昭和七年十二月発行）『新草』創刊号、昭和七年八月号より選句掲載）  
前田弥一（岳人）（一九六五）『自選 岳人句集』私家版  
松本椿年（一九三四）『各地句座 駿河小山あゆみ句會』『大富士』第四卷第十一号、一九頁  
松本椿年（一九六六）『私の雅号』『みづうみ』第二二三号（昭和四十一年二月号）、二〇頁

資料一 松本椿年（傳次郎）年譜（改訂第三版）

年月	年齢	出来事
明治二十年（一八八七）七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生（七月七日） 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾拾）四十五歳、母きく四十二歳 義兄紋次郎（俳号竹因）二十六歳、長姉まさ二十歳、 次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年（一九〇一）十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさ、に長女りん生まれるが、翌明治二十五年（一九〇二）一月早世

松本傳次郎（椿年）（一九七〇）『句集 老雅』私家版

松本傳次郎（椿年）（一九八二）『第二句集 限界』私家版

宮川充司（二〇一六）『田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作―』『椋山女学園大学研究論集』第四十七号 人文科学篇、四三―五九頁

宮川充司（二〇一七）『田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）―明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品―』『椋山女学園大学研究論集』第四十八号 人文科学篇、二三―四〇頁

宮川充司（二〇一八）『田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）―昭和初期から昭和四十年頃（高齢期）までのライフイベントと作品―』『椋山女学園大学研究論集』第四十九号 人文科学篇、二一―三六頁

小笠原龍人編（一九六八）『塔創刊十周年記念合同句集 星苑』塔俳句会

小笠原龍人編（一九七三）『塔創刊十五周年記念合同句集 蒼穹』塔俳句会

小笠原龍人（一九七四）『句集 孤灯』塔俳句会

湯山逸素（一九六九）『逸素句集』私家版

\*教育学部 子ども発達学科

明治二十七年（一九〇四）四月	六歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校（尋常科）入学 父禾拾の句会の折、最初の朝寒の句を口ずさみ喝采
明治三十一年（一九〇八）三月	十歳	朝寒く茶持茶碗の水りいし 妹あき（勘太郎三女）誕生
明治三十一年（一九〇八）九月	十一歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校（尋常科）卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作 静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校（高等科）進学 妹あき早世

宮 川 充 司

明治三十二年 (1899) 六月 八月	十一歳	同村の山崎伊三郎の養子となる
明治三十四年 (1901) 一月	十二歳	妹イワ（勘太郎四女）誕生
明治三十五年 (1902) 三月	十三歳	長兄半治 室伏まつと婚姻
明治三十九年 (1906) 十月	十四歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校（高等科）卒業
明治四十年 (1907)	十九歳	義兄松本紋次郎まさ夫婦、砂山のぶ（明治三十八年二月生一歳）を養女とする
明治四十一年 (1908) 二月	二十歳	富士紡績小山工場勤務
明治四十二年 (1909) 二月	二十一歳	次兄啓作小野家（生土）に婿養子
明治四十三年 (1910) 十月	二十二歳	六合村生土三十六番地に転居
明治四十四年 (1911) 十一月	二十三歳	山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 駿東郡北郷村山崎利三郎の次女すみと婚姻入籍
大正二年 (1913) 七月 十一月	二十六歳	生家に近い小山町中島十八番地に転居 次女サク誕生 妹イワ没（行年十五歳）
大正五年 (1916) 七月	二十八歳	長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいずれも早世
大正六年 (1917) 九月 十一月	二十九歳	母きく没（行年七十一歳 老衰）
大正九年 (1920) 二月	三十歳	分家（小山町中島六十二番地に居住） 長兄半治 岩田やすと再婚 三女志磨誕生
大正十年 (1921) 五月	三十二歳	長兄半治四男紋地（嗣子）誕生
大正十一年 (1922) 四月 十二月	三十三歳	長兄半治妻やすと再婚（行年二十八歳） 長兄半治 りょうと再婚
	三十四歳	四女みどり誕生
	三十五歳	五女愛子誕生 長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳）

大正十二年 (1923) 八月 九月 十月	三十六歳	富士紡績小山工場労働争議 関東大震災 富士紡績小山工場被災 死傷者多数 富望主追悼句会天位（選者服部畊石） 供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から本格的に俳句を作り始める 富士紡績小山工場内に俳句部創部『薔』創刊 この頃、加納野梅門下坂本緑村帰村 加納野梅坂本緑村宅訪問（昭和三年以前） 加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	長兄半治妻りょうと没
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	長兄半治没（行年五十歳）
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	末子（六女）喜美子誕生
昭和四年 (1929) 四月 七月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と投句 古見豆人駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句 『曲水』第十四巻第十号（昭和四年七月号）に初掲載 大藪の明るさ見ゆる辛夷かな 夕風に春行く麥の戦きかな
昭和五年 (1930) 四月 六月	四十二歳	『あゆみ句帖』刊行 小山町立成美尋常高等小学校、小山町立第一尋常高等小学校に改称 昭和天皇静岡行幸 行幸に就き天覧糸の飾玉を作る ともすれば汗ばめる手を洗いつつ『新草俳句集』一〇八頁
昭和六年 (1931) 十月	四十三歳	古見豆人大富士吟社創設 俳誌『大富士』創刊同人
昭和七年 (1932) 十月	四十四歳	草庵新築 飾矢の鬼門差しゐる銀河かな（『曲水』第十七巻第三号）
	四十五歳	富士紡績小山工場退社

田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）

昭和八年 (1933) 一月	四十五歳	正月富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八巻第四号の竿頭を飾る 吹雪く中に御慶かはわして消えにけり （『曲水』第十八巻第四号三五頁） 末子喜美子小山第一尋常小学校に入学 木の芽 末子入学 広げたる本の匂ひや子の芽晴れ （『大富士句帖第一輯』一七頁） 石田仏子あゆみ句会初参加
昭和九年 (1934) 九月	四十七歳	
昭和十年 (1935) 一月	四十七歳	この頃から『曲水』への投句休止 義父逝く三句 凍土に放り出したる飾りかな 松とりし穴に立てけり門位牌 霜に立てて折れし線香や笹子鳴く （『大富士』第五巻第三号 昭和十年三月号 三頁） 小山第一尋常高等小学校教員大島源悟郎君溺死（三句） 水底の子を呼ぶ母や雲の峰 夏の草句はしく焚火煙けり 暮れんずる水に火映える河鹿かな （『大富士』第五巻第十号 昭和十年十月号 四頁） 次姉くら没（行年六十三歳）
昭和十一年 (1936) 三月	四十八歳	
昭和十二年 (1937) 十一月	五十歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集 秋雨を撃手にはじきて征きにけり （『大富士』第八巻第一号 昭和十三年一月号） 古見豆人小山第一尋常高等小学校校長を退職し、湘南学園 （高座郡藤澤町鶴沼）に異動 大富士吟社東京世田谷に移 転 豆人先生送別句會 半こげしま咲満ちし櫻かな （『大富士』第八巻第六号「各地句座 駿河小山 豆人先生 送別句會四月二日小山第一尋常高等小学校被服室」）
昭和十三年 (1938) 四月	五十歳	
昭和十四年 (1939) 一月	五十一歳	初孫光弘誕生 孫の尿膝にぬくとし今朝の秋 秋の灯や己がおならに怖る兒 （『大富士』第九巻第十一号 昭和十四年十一月号） 豆人師小山再来訪
二月		

十二月	五十二歳	本家甥紋地戦死 末子喜美子を松本本家の養女とする
昭和十五年 (1940) 四月	五十二歳	長女イマの配偶者杉山辰雄と養子縁組（松本家嗣子とする） 甥紋地の遺骨と軍刀帰還 戦死せる甥の遺骨を迎えて（二句） 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく （『大富士句帖』第四輯『大富士』第十巻第八号） 内孫京子（辰雄イマ長女）誕生
昭和十六年 (1941) 二月	五十三歳	次女サク婚姻
四月		『大富士』第十一巻第四号への投句を最後に投句休止 父八十六歳生前墓碑を建つ（二句） 冬風の入日ににじめり朱入文字 冬風や己が石碑にぬかつける 十二月のれんげ咲きけり霜の中
昭和十七年 (1942) 二月	五十四歳	内孫奈美江誕生
昭和十八年 (1943) 十一月	五十六歳	義兄紋次郎没（行年八十六歳）
昭和十九年 (1944) 二月	五十六歳	孫光弘早世（行年六歳）
昭和二十年 (1945) 二月	五十七歳	三女志磨婚姻
十二月	五十八歳	次兄啓作没（行年六十一歳）
昭和二十二年 (1947) 四月	五十八歳	内孫典彦誕生（二月八日） 四女みどり婚姻
昭和二十三年 (1948) 五月	五十九歳	末子喜美子、山崎栄と婚姻（松本本家の嗣子とする）
昭和二十四年 (1949) 四月	六十一歳	『大富士』投句一時復帰（第十八巻第五号・十一号 第十 九巻第六号・十号）GHQによる『大富士』の検閲廃止 本家外孫卓美誕生 内孫時男誕生

昭和二十五年 (1950) 九月	六十三歳	本家外孫幸久誕生
昭和二十六年 (1951) 十一月	六十四歳	五女愛子婚姻（石田仏子夫妻が仲人）
昭和二十八年 (1953) 七月	六十五歳	豆人師を迎えた句会参加 足柄支部句会再開 七月一日円通寺 ダリや浴衣青田句會時鳥廻吟 時鳥夜更けの峯に何の灯ぞ 『大富士』第二十三巻九号 昭和二十八年九月号 支部精進情報 足柄支部 豆人師を迎えた足柄支部句会 萩廻吟雑詠句會 霧の中に朝の音あり鳥渡る 『大富士』第二十三巻第十二号 昭和二十八年十二月 支部精進情報 静岡県足柄支部
昭和二十九年 (1954) 二月	六十六歳	『大富士』第二十四巻二号への投句再開 老後 まだ餅をつき得る力ありにけり 凶作の田面ともなし初日の出 足柄峠豆人句碑（春風は幼けき日の句ひかや）除幕式記念句会（五月二十三日） 富士からの薫風句碑の座を巡る（記念句会） 本家外孫いさ子誕生
昭和三十年 (1955) 五月	六十七歳	妻すみ逝去 行年六十九歳 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつろなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に佇つ 師よりの悼句南風の線香つき足しぬ 『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号
昭和三十一年 (1956) 三月	六十八歳	湯山逸素細道會を起こし、俳誌『細道』創刊
昭和三十三年 (1958) 十月 十一月	七十一歳	外孫孝光早世 古見豆人没（十一月二十二日花石路忌） 俳誌『大富士』第二十五巻十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊
昭和三十四年 (1959) 一月	七十一歳	小笠原龍人『大富士』の後継誌として『塔』創刊 この年の内に『塔』同人として参加

昭和三十五年 (1960) 十月	七十三歳	原田濱人龍坂峠句碑建立 句碑除幕式に湯山逸素の誘いで列席
昭和三十六年 (1961) 一月	七十三歳	原田濱人主宰の『みづうみ』同人参加 植ゑ進む苗木苗木の陽炎へる 括り桑解けて陽炎さかんなる 『句集 老稚』四〇頁 括り桑解けが陽炎広これり 『みづうみ』第二五六号 昭和三十六年五月号
昭和三十八年 (1963) 十二月	七十六歳	義弟事故死 入寂の足の硬ばり北風す 『みづうみ』第二百八十九号 昭和三十九年二月号 夜の落葉悲報に急ぐ道細く 風に狂ふ木の葉の中を極ゆく 昨日埋めし墓なれ木の葉はやためて 『塔』第六巻二号 昭和三十九年二月号
昭和三十九年 (1964) 一月	七十六歳	内孫京子婚姻 とつぐ娘の門出初東風めぐる石 『塔』第六巻第三号 昭和三十九年三月号 仏だんの春灯に震え角かくし 春寒や嫁ぎゆく娘の別れ言 湯山素鷗没（三月十一日素鷗忌） 喜寿の祝 七夕の笹影に居て喜寿の膳 『みづうみ』第二百九十七号 昭和三十九年十月号 初曾孫（孫京子長男）誕生
昭和四十年 (1965) 三月	七十七歳	湯山素鷗一周忌追善句会 素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影 花冷や句碑にたつぷり手向け酒 『みづうみ』第三百十号 昭和四十年十一月号 内孫奈美江婚姻 光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る 『みづうみ』第三百十号 昭和四十年十一月号 初曾孫の句 庭若葉笑いおほへし児を腕 『塔』第七巻第八号 昭和四十年八月号 初曾孫初節句 尾を富士へ箱根へ振りて鯉鱈 『塔』第七巻九号 昭和四十年九月号
五月		

田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）

九月	七十八歳	嗣子辰雄病没（行年五十九歳 九月二十二日没） 嗣子淋巴腺肉腫にて逝く 秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 『みづうみ』第三百十二号 昭和四十一年一月号
昭和四十一年 (1966) 一月 五月	七十八歳	菩提寺勝福寺住職突如入寂 明けきらぬ山門凍ての固き踏む 『塔』第八卷第五号 昭和四十一年五月号 豆人先生句碑の除幕 五月八日ゆかり深き金時神社にて 献詠句 秋晴や水に影もゆ杜の朱 『塔』第八卷第七号 昭和四十一年七月号 燕信雁報 小見山葭女 一四頁 大島旅行 梅雨日眩しあんど並び撮られ居て 『みづうみ』第三百二十二号 昭和四十一年十一月号 二人目の曾孫（内孫京子長女）誕生
十月 六月	七十九歳	親族事故死（十二月二十八日） 元日や床に据えたるお骨壺 『塔』第十卷第六号 昭和四十三年六月号 会葬者揃う間庫裡のストープへ 葬り来て浄めの手塩肝に入む 『みづうみ』第三百四十二号 昭和四十三年七月号 塔俳句会『塔創刊十周年合同句集 星苑』刊行
昭和四十二年 (1967) 十二月	八十歳	初曾孫袴着 袴着の拍手小さく響きけり 『塔』第十一卷第二号 昭和四十四年二月号 三人目の曾孫（内孫奈美江長男）誕生
昭和四十三年 (1968) 九月 十一月	八十一歳	四人目の曾孫（内孫京子次男）誕生 『句集 老稚』出版
昭和四十四年 (1969) 八月 九月	八十二歳	病床の原田濱人を門弟と見舞う 師をかこみ小春の障子開けて集る 手に残る師の握力や小春風 『みづうみ』第三七五号 昭和四十六年四月号
昭和四十五年 (1970) 四月 十一月	八十三歳	

昭和四十六年 (1971) 四月	八十三歳	父松本松本勘太郎（俳号吉野庵禾杓）の句碑松本本家に建立 初日の出月をうしろに拝みけり 禾杓 冬晴の句碑自宅前庭に建立 冬晴や底藻さやかに動き居り 椿年 菩提寺勝福寺晋山式 晋山の経に天風来て薫る 『みづうみ』第三八〇号 昭和四十六年九月号 円覚寺舍利法式団参 管長の一喝凛とびえ渡る 法悦や鎌倉山の月まろし 『塔』第十四卷第一号 昭和四十七年一月号
五月	八十四歳	
九月	八十五歳	小山町大水害（七月十二日） 田も畑も川原となりて虫すだく 決潰のダム底幽し尽の虫 『塔』第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 『みづうみ』主宰原田濱人没（八月四日 八十八歳） 五人目の曾孫（内孫奈美江次男）誕生 芹沢風外没 法師蟬水さびてゐる墓茶碗 『みづうみ』第三九六号 昭和四十八年一月号 伊勢団体バス一泊旅行 波荒るる雨の二見の十三夜 『塔』第十五卷第七号 昭和四十八年七月号
昭和四十七年 (1972) 七月	八十五歳	
八月 九月 十月		
昭和四十八年 (1973) 三月	八十五歳	前田岳人没 行年八十七歳（三月二十八日） 岳人逝く五句 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな 『みづうみ』第四百二二号昭和四十八年七月号 塔俳句会『塔創刊十五周年合同句集 蒼穹』刊行
九月	八十六歳	六人目の曾孫（内孫奈美江長女）誕生
昭和四十九年 (1974) 三月 四月 九月	八十六歳 八十七歳	米寿の祝 子孫曾孫うらかに顔を揃えけり 『塔』第十六卷第八号 昭和四十九年八月号 石田仏子 and 光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会 家督を嫡孫典彦に譲る 孫にゆずる登記すまし月涼し 『塔』第十六卷第十一号 昭和四十九年十一月号

宮 川 充 司

昭和五十年 (1971) 十月 十一月	八十八歳	内孫典彦婚姻 静岡県知事杯賜杯 いみじくも知事杯賜う天高し 〔塔〕第十八卷第二号 昭和五十一年二月号)
昭和五十一年 (1972) 一月	八十八歳	曾孫がさらに増える また一人曾孫が増えたる年迎ふ 〔塔〕第十八卷第五号 昭和五十一年五月号水煙集 同人作品 (三三頁)
昭和五十六年 (1981) 六月 九月	九十三歳 九十四歳	勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会 (六月十日) 追悼の句もなく梅雨の忌に侍る 〔みづうみ〕第四九九号 昭和五十六年八月号) 石田仏子没 (九月十八日) 行年七十四歳 『第一句集 限界』出版
昭和五十七年 (1982) 四月 八月 九月	九十四歳 九十五歳	『仏子句集 花筏』没後出版九月 湯山逸素没 行年九十二歳
昭和五十九年 (1984) 九月	九十七歳	俳誌『椎』投句絶筆 夏めける空を編みをり朝の蜘蛛 薫風や名なき一濯木々を打つ この土地の清水はみんな富士よりす 〔椎〕第百九号 昭和五十九年九月号) 初曾孫成人の祝い 祝吟 大木となるも一つの実からなる
昭和六十一年 (1986) 二月	九十八歳	行年百歳にて逝去 絶吟 春風に乗つてゆかばや句の行脚